

極楽寺自治会所蔵『涅槃図』の図様について

みやざき歴史文化館

学芸員 松下 朋生

【要 約】

仏教の祖である釈迦の入滅は、弟子や信者にとって衝撃的な出来事であり、その情景などは多くの経典等に遺されてきた。この釈迦の死を絵画で表した仏画を涅槃図ねはんずという。日本では昔から宗派問わず、釈迦の入滅日である 2 月 15 日に涅槃会が行われ、涅槃図は本尊として飾られてきた。そのため全国各地に数多くの涅槃図が現存する。本研究ではみやざき歴史文化館(以下「当館」とする)で保管している寄託資料である極楽寺自治会所蔵『涅槃図』(以下「極楽寺本」と称する)の図像と画面形式を先行研究で判明している涅槃図の分類方法などと照らし合わせて分析しまとめた。

はじめに

極楽寺本は、宮崎市大字広原字山王迫に存在した茲光山極楽寺ゆかりの 1m を超える大型掛軸である。極楽寺は鎌倉時代創建といわれており、明治時代の廃仏毀釈によって廃寺となった寺院¹である。極楽寺ゆかりの仏像・仏画などは廃仏毀釈の被害を免れ、極楽寺付近に住む地域の人々によって守られ、現在は当館において寄託資料として保管・展示を行っている。

今まで極楽寺本の図像に関する研究は行っておらず、どのような図像が描かれ、どういった形式の涅槃図であるか、詳細については不明であった。本研究では極楽寺本の図像や画面形式を記録・整理し、涅槃図の先行分類と比較していき、極楽寺本の特性を紐解いていく。

第 1 章 涅槃図の概要と形式

第 1 節 涅槃図の概要について

涅槃図とは、釈迦の死、葬儀の情景が描かれた仏画であり、釈迦の生涯において因縁をもつ衆生、出家弟子、在家信者も多く登場し、動物までもが嘆き悲しむ姿を描いている。涅槃図の画面構成や登場する人物は、『大般涅槃經』(三卷本・四十卷本)のほか、同経に後世付加された『大般涅槃經後分』²などといった経典などに説き示されている。

日本における現存最古の涅槃図は、応徳 3 年(1086)の墨書銘がある高野山金剛峰寺の『仏涅槃図』であるが、すでに飛鳥、白鳳、天平といった古い時代には、仏伝美術が伝来していたことや「興福寺流記」などといった文献から涅槃図が長い間、描き続けられていたことがわかる。日本では仏伝の中でも特に代表的な釈迦の誕生と釈迦の入滅は法会として取り上げられ、釈迦の誕生日である 4 月 8 日

の灌仏会には釈迦が誕生した際の姿を模して鑄造・彫刻された誕生仏が、釈迦が入滅した日である 2 月 15 日の涅槃会では涅槃図が各本尊として用いられてきた。そのため誕生仏や涅槃図は、日本のすべての宗派が寺の必需品として保有しており、両方とも現存する作品が多い。特に涅槃図は涅槃会が始められて以来、制作が盛んであったことから、近世にいたるまで描き続けられたことも作品の多さから推測できる³。

第2節 涅槃図の形式について

本研究では涅槃図の形式を解説していくにあたって、中野玄三氏が唱えた新旧二つの形式と比較していく。中野氏が唱えた二形式は以下のとおりである。

まず第一形式(旧様)と称する形式は、平安時代後期から鎌倉時代の作品を指す。特徴として釈迦の姿は両手を体側面につけて臥す場合が多い。また釈迦が臥す宝床の描写が向かって右側面を見せるように描く場合が多い。第一形式は唐時代の涅槃図の影響が反映されているとみえ、人々の表現にも唐画の表現と共通するところが窺える。次に第二形式(新様)は、鎌倉時代以降になってあらわれたもので、宋画を基にしたと考えられる。第一形式と比較すると、釈迦の姿が比較的小さくなり周囲の人々が増える。画面構成においても第一形式にみられる静寂な雰囲気に対して、菩薩や天部、仏弟子、信者が悲嘆に暮れる姿が大げさに描かれるようになる。釈迦の姿は、右手枕し、右脇を下にして横たわり両膝を曲げ、両足を重ねた姿となり「ぶつはつないおんぎょう仏般泥洹經」に記されている姿で描かれる場合が多くなる。また宝床の描写が向かって左側面を見せるように描く場合が多い⁴。この二形式については、現在、涅槃図の形式を分類する上で有効な手法として定着している。しかし、はっきりと区別できる作品と区別ができない作品があり、両形式の折衷形式も存在する。これはそれだけ多くの涅槃図が制作されたことを意味し、涅槃図の多様性を感じさせる。

また涅槃図を観察する上で画面の大きさにも注目する必要がある。第一形式の画面は、横長もしくは正方形に近いものが多い。それに対して第二形式では、宋画の影響を受けて縦長のものが多くなる。これは宋元画の技法において人物や動物、背景等すべての表現の描写が現れたことにより、画面が拡大し縦長の画面が誕生したと考えられている。しかし鎌倉時代以降の涅槃図においては寺院によって、涅槃会を行う仏堂内部の空間構成の影響により、横長、縦長のいずれを採用するか、区別が生じていたことが現存する涅槃図から読み取ることができる⁵。以上の形式等を踏まえて第2章で極楽寺本の画面形式に照らし合わせていく。

第2章 極楽寺本の分析

第1節 極楽寺本について

本研究で採り上げる極楽寺本(図1)は、縦 127 cm、横 86 cm の本紙に描かれた紙本著色の涅槃図である。画面は縦長で、中央には釈迦が臥する姿、その周囲には仏弟子、信者、神、菩薩、そして動物が描かれている典型的な涅槃図である。制作年は不明だが、画面右下に作者と考えられる「みづきみづき筆」と墨書がある。また画面下部両端には、二名の法名が記されていることから涅槃会で掲げる仏画という意味合いよりも両人の供養のために描かれた作品であると考えられる。

第2節 極楽寺本の形式について

まずはじめに、極楽寺本の全体的な画面構成を確認していく。釈迦が入滅した日は満月であったため、画面上部中央には満月が描かれている。画面上部右側には釈迦の弟子であった阿那律が先導して、釈迦の母である摩耶夫人とその侍女たち一行が釈迦の下に駆け付けている。次に画面中央には、釈迦が宝床の上で右脇を下にし、右手枕で臥する姿、宝床の後ろには釈迦が入滅した地であるクシナガラに流れる跋堤河（ヒラニヤヴァティー河）が描かれ、宝床の両脇には栄枯を表した沙羅双樹が立つ⁶。そして宝床の周囲には、釈迦の入滅にあたり参集した菩薩や天部等といった聖界の者、鬼などの異界の者、出家して弟子となった比丘や比丘尼、在家のまま信者となった者、さらに動物までもが嘆き悲しむ姿で描かれている。以上のことから画面構成に関しては、全国に残る涅槃図とほぼ共通していることがわかる。また本紙は縦長を採用しており、釈迦を中心に人物や動物が放射線状に位置している。



図1 『涅槃図（極楽寺本）』
（極楽寺自治会所蔵）

次に形式の特徴がみられる釈迦の姿と宝床に注目してみる(図10)。

極楽寺本における釈迦の姿は右脇を下にし、右手枕で両膝を屈した姿で描かれ、宝床は向かって左側面を描写していることが確認できる。よって極楽寺本は、前章の中野氏が唱えた分類法に照らし合わせると第二形式(新様)を基にして描かれた涅槃図であることがわかる。

第3節 極楽寺本に描かれた人物画

極楽寺本には、合計76名の仏弟子、在家信者、菩薩、天部などが描かれていた。今回、極楽寺本に描かれた人物を特定するにあたって、服装や持ち物などの図像から人物を特定することができた。特定できた11名については、以下のとおりである。



図2 『涅槃図』 摩耶夫人
（部分 極楽寺自治会所蔵）

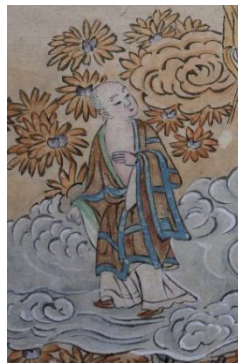


図3 『涅槃図』 阿那律
（部分 極楽寺自治会所蔵）

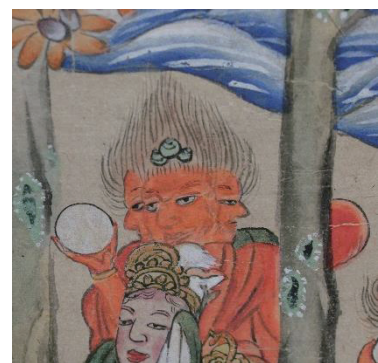


図4 『涅槃図』 阿修羅
（部分 極楽寺自治会所蔵）



図5『涅槃図』 緊那羅
(部分 極楽寺自治会所蔵)



図6『涅槃図』 迦楼羅
(部分 極楽寺自治会所蔵)

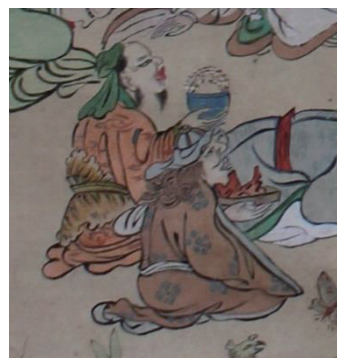


図7『涅槃図』 純陀(奥)・善与竜王(手前)
(部分 極楽寺自治会所蔵)



図8『涅槃図』 那羅延金剛・執金剛神(仁王尊)
(部分 極楽寺自治会所蔵)



図9『涅槃図』 速疾鬼
(部分 極楽寺自治会所蔵)

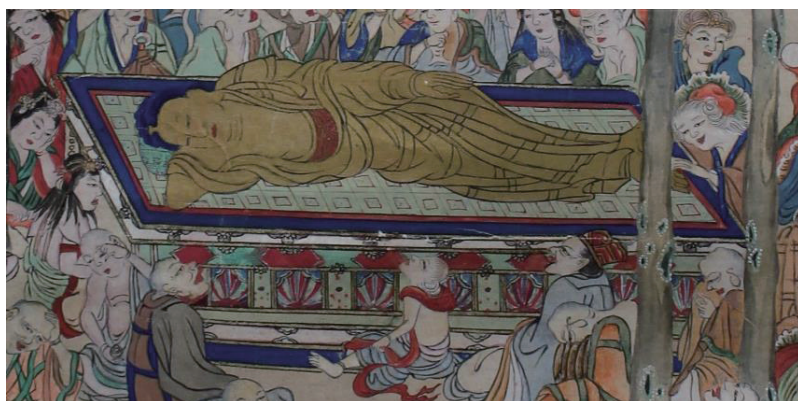


図10『涅槃図』 釈迦(正面)・老女(右端)
(部分 極楽寺自治会所蔵)

以上が図像や画面の位置関係から特定できた11名の仏弟子・信者・神々であるが、それ以外にも情報不足で断定できなかった人物も存在した。今後の研究のためここに記すが、宝床正面近くで足を投げ出し嘆き悲しむ童子(図10)が描かれている。この童子は他涅槃図では迦葉童子といわれている。迦葉童子の図像は菩薩のような衣装に童子姿で、髪型は角髪状に描かれることが多い。しかし極楽寺本の童子は頭部が剃髪で描かれているが、姿は迦葉童子と同様であることから、作者の涅槃図に関する知識を図り知ることのできる興味深い図像のひとつといえる。またこの他にも、月蓋長者や難陀竜王といった人物であろう図像が見られたが、極楽寺本の図像は衣装や持ち物などに独自性が見られるため、今後様々な涅槃図と比較していく必要がある。

次に人物の図像から涅槃図がどのような形式に枝分かれしていくのか、江戸時代に制作された涅槃

図の図像から導き出された竹林史博氏の分類法などを参考に比較を試みた。竹林氏が唱えた分類法は、最も特徴が明確な江戸時代の涅槃図制作に多大な影響を与え人気を博した構図「明兆型」と鎌倉時代から涅槃図を手掛ける南都奈良の絵仏師集団が描いた涅槃図に多く見られる構図「奈良型」を中心にさらにそこから「明兆系完成期型」、「等伯型(奈良型二)」などに分類する方法である⁷。

以上の図像の分類方法を極楽寺本に照らし合わせていく。今回、注目する点として釈迦の目と足の表現に着目した。極楽寺本の釈迦は開眼した状態であり、足の形は沙羅双樹と老女(図10)で確認しづらいが、やや八の字になっていることがわかる。以上のことを竹林氏の分類法に照らし合わせていくと、釈迦の開眼した姿は「奈良型」の特徴であり、足の表現は「明兆型」の特徴であることがわかった。また極楽寺本に描かれている速疾鬼の合掌する図像(図9)や画面中央正面に少し離れたところに描かれた竜王の図像(図11)は、「明兆系完成期型」の涅槃図に見られる図像であることも注目する点といえる⁸。また極楽寺本的那羅延金剛と執金剛神の図像(図8)においても、両神が手を投げ出し、足を絡ませた姿で描かれているが、この図様は竹林氏が「明兆型」と「奈良型」と別に分類する「奈良型」要素を多く含む長谷川等伯が描いた涅槃図の流れを汲む構図「等伯型」に該当する涅槃図⁹に同様の図像を確認した。また形態は絵巻物であり、時代が遡るが室町時代に描かれた伝狩野元信筆『釈迦堂縁起』(清涼寺蔵)¹⁰に描かれた涅槃の場面においても仁王尊の同様の図像が描かれていることはとても興味深い。以上のことから極楽寺本は「明兆型」「奈良型」「等伯型」などの様々な図像が取り込まれた江戸時代中期以降の作品であると考えられる。

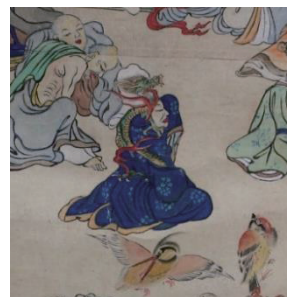


図11 『涅槃図』 竜王
(部分 極楽寺自治会所蔵)

第4節 極楽寺本に描かれた動物画

涅槃図の動物画は、涅槃図の典拠である『大般涅槃經』(四十卷本)に涅槃の場集った動物名が記されているものの、その多くは長い間涅槃図に登場することはなかった。しかし、平安時代末期以降になると次第に動物が描かれるようになったことが現存する涅槃図から確認することができる¹¹。時代が下がるにつれ、動物の種類も多様化していくとともに日本人に馴染みのある動物が増え、図像の類型化も見られるようになる。極楽寺本においては、哺乳類・爬虫類19匹、昆虫10匹、鳥類32匹、聖獣5匹、合計66匹が描かれていた。特に鳥類の数が多く、人物画や他の動物画と違って鳥類のみが繊細なタッチで画面の隙間を埋めるように描かれている。また多くの動物の中で、中心的存在なのが象と獅子である。経典においても象王と獅子王として両巨頭として扱われており、獅子や象の図像の類型化は時代が下るにつれ顕著に見られるようになる。獅子は緑のたてがみや尾、連銭文のある体となり、下を向く、後ろ向きに口吻を上げるもの、逆立ちするもの、両前足を広げ仁王立ちするものがみられる。象はほとんどが白象で、うずくまって鼻を下げるもの、上げるもの、仰向けにのけぞるものとある¹²。極楽寺本においては画面下部中央に象と獅子が描かれており、画面向かって右側に象は上に鼻を上げ、獅子は画面向かって左側に仰向けとなって転倒した状態で描かれている(図12)。また涅槃図に描かれるサイは霊獣として描かれ、頭上に一角があり、背に甲羅を負う姿に図像が固定されている。この図像は大陸伝来のサイの霊獣的表現であり正倉院御物にも同様の表現がみられる¹³。これが涅槃図におけるサイの図様の源流であり、極楽寺本においても同様の表現が見られる(図13)。以上のことから動物の類型化は極楽寺本にも多く見られることがわかる。



図 12 『涅槃図』 獅子(左)・象(右)
(部分 極楽寺自治会所蔵)



図 13 『涅槃図』 サイ(中央手前)
(部分 極楽寺自治会所蔵)

おわりに

今回、極楽寺本の画面形式や人物・動物の図像などを詳細に分析し、先行研究における分類方法と照らし合わせることで、制作年不明の極楽寺本が江戸時代中期以降の作品であることがわかり、極楽寺本が様々な形式・図像の上で成立した作品であることも判明した。長い間描かれてきた涅槃図を明確に分類することは困難であるが、こういった流れで涅槃図の図像が伝播、取捨選択され個々の涅槃図に反映されていったのか、涅槃図研究の無限の可能性を感じた。

本研究では極楽寺本のみを分析したが、涅槃図は江戸時代の檀家制度によって、年に一回、涅槃会で拝観できる人々の生活に溶け込んだ仏教美術の作品といえ、宮崎市内にもおいても当時数多くの涅槃図が存在したと考えられる。今回の研究を宮崎市内に残る涅槃図の一考察し、今後の宮崎市内における涅槃図研究の一助になればと考える。

註

- 1 住吉郷土誌編集委員会編『住吉郷土誌』(住吉地区振興会、1993、p420)より参照。
- 2 石田尚豊、田辺三郎助、辻惟雄、中野政樹監修『日本美術史事典』(平凡社、1991、「涅槃図」項 p729)より参照。
- 3 中野玄三編、国立文化財機構監修『日本の美術 涅槃図』(第 268 号、至文堂、1988、p 25-27)及び註 2 掲出書籍「仏伝図」項 p819 - 820 より参照。
- 4 註 3 掲出書籍 p 29-38 より参照。
- 5 註 3 掲出書籍 p 31 より参照。
- 6 中村元訳『ブッダ最後の旅 大パリニッバーナ経』(岩波文庫、2018)を参照。
- 7 竹林史博著『知っておきたい涅槃図絵解きガイド』(青山社、2014)より参照。
- 8 註 7 掲出書籍より長野県泉龍院蔵(速疾鬼及び竜王)及び和歌山県恵運寺蔵(速疾鬼)を図版参照。
- 9 註 7 掲出書籍より富山県大法寺蔵(那羅延金剛・執金剛神)を図版参照。
- 10 註 3 掲出書籍 p 15 より図版参照。
- 11 註 3 掲出書籍 p 70 - 77 より参照。
- 12 赤澤英二著『涅槃図の図像学 - 仏陀を囲む悲哀の聖と俗 千年の展開 - 』(中央公論美術出版、2011、p106)及び註 3 掲出書籍 p77 より参照。
- 13 註 3 掲出書籍 p77 より参照。

図版

・『涅槃図』 紙本著色 一幅 127.0×86.0 cm 極楽寺自治会所蔵